

「盆池」詩の変容

——中唐・韓愈から元・劉因まで

水津有理

はじめに

「盆池」とは文字通り、陶製または石製の盆を庭に埋めて、極く小さな池に設えたもの。その中に荷花や菰などの水草を配し、あるいは小さな魚を養い、わずかな沙洲に広々とした地への連なりを表現し、苔むした拳大の石を翠の峰と見立てたものである^①。つとに指摘のあるように、六朝貴族が遊び、また隠逸の思いを託した大規模な荘園や広大な山水に代わって、士人のあいだで小規模な庭園やミニチュアの池沼が愛好されるようになったのは、九世紀初頭以降、中唐の頃に始まる。また、そうした現象の背景として、一見狭小とみえる空間に実は外界の天地が内包されておるとする「壺中天」の思考があるという^②。私的な庭園における小規模の池沼を詩に詠んだものとしては、白居易による一連の「小池」詩^③がよく知られているが、中唐・韓愈に始まる「盆池」詩もまた、そうした流れの中にあらわれた作品群の一つであるということができよう。本稿では、韓愈から北宋・南宋を経て、元・劉因にいたる「盆池」詩の系譜をたどり、盆池の世界がどのように描かれてきたかについて、閉じた人工の世界と外なる自然界、詩人と盆池の

関係性などの点から、その変遷を考察してみたいと思う。

一 「盆池」誕生——韓愈の「盆池」五首

「盆池」詩の系譜は、錢徽による「小庭の水植率爾として詩を成す（小庭水植率爾成詩）」と、これに唱和した韓愈「錢七兄曹長（＝錢徽）の盆池に植うる所に和し奉る（奉和錢七兄曹長盆池所植）」、王建「錢舍人の水植詩に和す（和錢舍人水植詩）」、及び韓愈による組詩「盆池」五首に始まる。前者は元和八、九年頃の作、また後者の「盆池」五首は、元和十年（八一五）、長安での作とされる。^①この年、韓愈は四十八歳。前年に史館修撰のまま考功郎に任じられ、繼いで知制誥となった。^②次に挙げるのは組詩の序に相当する其一である。^③

老翁真個似童兒 汲水埋盆作小池 老翁真個に童兒に似たり、水を汲み盆を埋めて小池を作る

一夜青蛙鳴到曉 恰如方口釣魚時 一夜青蛙鳴きて曉に到るは、恰も方口魚を釣る時の如し

老翁はほんとうに子供のよう、水を汲み盆を埋めて小さな池を作る遊びに興じている。その盆池で夜が明けるまで鳴き続ける蛙の声を聞いてみると、いつだったか、河南・方口の川のほとりで夜釣りした日を思い出す。

自らを天真爛漫な童兒に擬した冒頭の二句は、その後の歴代の「盆池」詩のなかに繰り返し用いられる表現。「方口」は現在の河南省済源県の川の名。河南尹時代の韓愈がしばしば遊んだ場所という。^④

続く三首は、水生植物の生長、水面を行く虫たちと魚群の攻防、水辺を求めてやってくる蛙など、小さな盆池に展開する生き物のすがたを畳み掛けるように描く。其二では「道う莫かれ盆池作りても成らずと、藕梢初めて種えて已に斉しく生ず。今より雨有らば君須らく記すべし、来たりて聴け蕭蕭葉を打つ声を（莫道盆池作不成、藕梢初種已齊生。從今有雨君須記、來聽蕭蕭打葉聲）」と蓮を詠み、眼前の小さな蓮葉から、それがやがて大きく育ち雨粒を受けて音を響かせるさまに思いをはせる。詩人の創造のなかで瞬く間に変貌する蓮のすがたは、あたかも植物の生長を記録したドキュメンタリー・フィルムを早回しで見せられているように鮮やかである。其三には「瓦沼の晨朝

水自ら清し、小虫無数 名を知らず。忽然分散して蹤影無く、惟だ魚児の隊を作して行く有り（瓦沼晨朝水自清、小蟲無数不知名。忽然分散無蹤影、惟有魚兒作隊行）と小さな虫たちと魚の攻防を描く。水面を行く無数の虫が忽然と散つて跡形もなく消えたと思つたら、目の前を小さな魚たちが悠然と泳ぎ去つていったのである。そして其四は蛙の再登場である。「泥盆 浅小なれば 詎ぞ池と成らん、夜半 青蛙 聖にして知るを得たり。一に聴^{ゆる}す 暗かに来たり伴侶を將いるを、鳴喚して雄雌を闘わすを煩わさず（泥盆 浅小詎成池、夜半 青蛙 聖得知。一聽暗來將伴侶、不煩鳴喚闘雄雌）—— 浅く小さな泥の盆ではあるが、夜半になればそこに水辺が出来つつあると悟つた蛙たちがやつて来る。蛙たちよ、こつそり伴侶を連れてくるのは構わぬが、ケロケロと鳴き騒いで求愛合戦をするには及ばない。このように、小さな世界に繰り広げられるささやかなドラマが鮮やかに切り取られた後、詩はいきなり、大きな広がりをもつた静謐な世界を描く。其五である。

池光天影共青青 拍岸纔添水數餅 池光天影共に青青、岸を拍つは纔かに添う水數瓶

且待夜深明月去 試看涵泳幾多星 且く夜深く明月の去るを待ち、試みに看ん幾多の星の涵泳するを

水の輝き、水に映る天の影はやがて一つの青となつた。たつた数瓶の水を加えるだけで、なみなみと満ちて岸を打つ波。ここでしばらく明月が去るのを待つて、どれだけの星が水に涵るかをみてみよう——水と天が一つになり、岸を打つ水と月の光がともに豊かに満ちるなか、詩人が心に描いたのは、やがて月が去り、夜明けが迫るとき、静かな水面を泳ぐ数多の星であつたのだ。

この組詩、ことに中間三首における盆池はあたかも自律した生態系のように描かれており、そこに大自然が仮託されていと読むこともできようが、私にはむしろ、小さなものたちの密やかな営みを仔細に描くことによつて、人間の意識の及ばぬところ、普段は目にも心にも留めない場所で展開される世界の真相のようなものに目を開かれた詩人の「センス・オブ・ワンダー」が凝縮されているように思われる。其二で、詩人が眼前の小さな蓮葉のすがたにやがて大きく成長した葉に打ちつける雨音の響きを聴くのも、また其五で、水と月光がともに溢れんばかりに満ちる世界

に、月が去り、生き物のにぎわいも去った後の静かな水面を夢想し、水底に揺れる暁の星を数えているのも、対象世界に対する驚き、感興の一つの現れであり、その産物としてイマジネーションが発動したものと感じられるからだ。其四に用いられる「聖にして知るを得たり」の語はこの後、宋人が好んで用いる語となるが、たとえば北宋・黃庭堅「中玉の早梅に次韻す 二首（次韻中玉早梅二首）」其二（『山谷内集詩注』卷一五）の「寒香を折り得たるも機を露さず、小窓斜日 両三枝。羅帷翠幕深く調護せしも、已に遊蜂の聖にして知るを得るを被れり（折得寒香不露機、小窗斜日兩三枝。羅帷翠幕深調護、已被遊蜂聖得知）」、南宋・陸游「鳴禽」（『劍南詩稿』卷四四）の「新晴 池館 春の来たること早し、簾外の鳴禽聖にして知るを得たり（新晴池館春來早、簾外鳴禽聖得知）」などの用例をみると、人の窺い知れぬところで起きている此細な、しかし着実な世界の変化を、人ならぬ小さな存在が察知しているという意で用いられており、ある意味、中間三首の世界観を象徴する語となっている。また、結びの一首に類似する表現は、たとえば白居易の「最愛曉暝時、一片秋天碧」（『官舍内新鑿小池』、『全唐詩』卷四三〇）、王建の「朝早獨來看、冷星沈碧曉」（『前掲「和錢舍人水植詩」』）など同時代の詩人の作中にもみられるのだが、韓愈のこの組詩においては、小さな世界の営みを接写した中間三首の存在によって、単なる水に映った天のすがた以上のもの、時間の運行や生命の営み、その循環などを感じさせるものとなった。こうして、小さく切り取られた人工の池は、より大きな世界の有機的な一部分に変貌し、一見取るに足らない小さな空間に、時間的にも空間的にも広がりとも興行きをもった一つの世界が誕生した——天真爛漫な子供に自らを擬した詩人によって創造された——のである。

以上みてきたように、韓愈の「盆池」五首の其五が描き出す大きな世界を支えているのは、中間三首の存在であるのだが、これ以後の唐代の「盆池」詩は、主に「小さな水が天を映す」という一点に拠って作られるようになった。たとえば杜牧「盆池」（『全唐詩』卷五二三）は盆池に天が映るすがたを「一片の天を偷む」と表現し、鏡のような水面に雲が湧き、足元に月が沈むと詠んだ（『蒼苔の地を鑿破して、他の一片の天を偷む。白雲鏡裏に生じ、明月階前に落つ（鑿破蒼苔地、偷他一片天。白雲生鏡裏、明月落階前）』）。また詩僧・齊己の「盆池の白蓮を觀る（觀盆池白蓮）」（同

卷八四七)は水に映つた天に更に重なる白蓮の倒影を「きつと花は思つてゐることだろう、清らかな秋水の底に、天に歸つた連れ合いがいるのだと」(「応に思うべし激盪たる秋池の底、更に歸天の伴侶の来る有るを(…應思激盪秋池底、更有歸天伴侶來)」)と詠んでいる。また浩虚舟の「盆池賦」(『全唐文』卷六二四)にも「雲鳥低く臨めば、鏡鸞の縹緲たると悞(≡誤)ち、庭槐俯映して月桂の扶疏たるかと迷う(雲鳥低臨、悞鏡鸞之縹緲。庭槐俯映、迷月桂之扶疏)」との表現がみられる。杜牧・齊己の二作品はいずれも「大きな天を映す小さな水」という発想を踏襲してはいるが、それによって広がりや奥行きのある世界を表現しえたというよりは、浩虚舟の賦にみられるような、水のもつ鏡的作用(あるいはその作用の結果としての水中の倒影)に着目して機智をみせたものといえるだろう。

二 「戸庭窄しと云うと雖も、江海の趣已に深し」——北宋の「盆池」詩

北宋の「盆池」詩は、劉敞(字・原甫)の「新たに盆池を置き、蓮荷・菖蒲を種え小魚數十頭を養う。終日之を玩びて甚た愛す可く、偶たま五言詩を作る(新置盆池種蓮荷菖蒲養小魚數十頭終日玩之甚可愛偶作五言詩)」(『公是集』卷六)に梅堯臣と韓維とが応えた唱和詩にはじまる。「芳を采るも未だ手に盈たず、潤を積むも尋に満たず。游魚亦た何ぞ樂しき、幽客此の心を同じくす(采芳未盈手、積潤不滿尋。游魚亦何樂、幽客同此心)」と取るに足らない盆池の小ささに言及しつつ、その小さな世界をのびのび泳ぐ魚——恐らくは『莊子』秋水篇の「鯈魚」を踏まえた表現——のなかに、自らの分を全うして生きることの喜びを重ねる劉敞は、「鵬翻りて滄海を蕩かし、龍起ちて山林を焚く。体を妨げれば反つて累すること多し、豈に若かん蹄涔に終うるに(鵬翻蕩滄海、龍起焚山林。體妨反多累、豈若終蹄涔)」と結び、本性に背いて害をなすよりもむしろ分相應の小さな世界(≡蹄涔、牛馬の蹄の跡にできた水溜り)に安んじたほうがよいと述べる。これに唱和した梅堯臣の詩「韻に依りて原甫が「新たに盆池を置き蓮花菖蒲を種え小魚數十頭を養う」の仕に和す(依韻和原甫新置盆池種蓮花菖蒲養小魚數十頭之仕)」(『梅堯臣編年校注』卷二二三)は次のようなものである。

瓦盆貯斗斛 何必問尺尋 瓦盆斗斛を貯う、何ぞ必ずしも尺尋を問わん

菖蒲未見花 蓮子未見心 菖蒲未だ花を見ず、蓮子未だ心を見ず

小鮮不足烹 安用芎餌沉 小鮮烹るに足らず、安くんぞ芎餌を沈めるを用いん

戸庭雖云窄 江海趣已深 戸庭窄しと云うと雖も、江海の趣已に深し

襲香而玩芳 嘉賓會如林 香を襲ねて芳を遊び、嘉賓会すること林の如し

寧思千里游 鳴櫓上清落 寧そ千里の游を思わんや、櫓を鳴らして清落に上らん

小さな瓦盆の池。菖蒲は花をつけず、蓮に実はなく、魚はわざわざ釣り糸を垂れるほどの価値もない小ささ——一詩はまずはそれがいかに取るに足らないものかを述べて始まる。そののち、その取るに足らない、一見狭小とみえる世界のなかに、実は美女や賓客が集う大きな世界があるのだ、千里の彼方まで行かなくても、目の前にあるこの清らかな水溜り（＝清落）に舟を漕ぎ出そうじゃないか、とユーモアをもって呼びかける。梅堯臣が「戸庭窄しと云うと雖も、江海趣已に深し」と述べたのと同じく、韓維もまた「原甫が「盆池に蒲蓮を種えて小魚を蓄う」に和す（和原甫盆池種蒲蓮畜小魚）」（『南陽集』巻四）において、盆池の「一斛の水」に「万里の心」を知ることができると詠んだ（「江湖豈に壮に非ざらん、浩蕩として尋ぬ可からず。安くんぞ知らん一斛の水、坐して万里の心を得るを（江湖豈非壮、浩蕩不可尋。安知一斛水、坐得万里心）。劉敞が盆池とそこに泳ぐ魚にみたものは、小さな世界を小さな世界として肯定し、その中に安んずることであったが、梅堯臣は小さな世界に大きな世界の「趣」を見出すことにより、韓維は小さな水に大きな世界の「心」を悟ることにより、その小ささを大きさに反転しようとしたものである。庭の窪みに盆を埋めて作られた極小の池が、ごく小さな場所、閉じられた空間ながら、より大きな外界の天地とながるものであるとする発想は、当初はその池に植えられた植物が自然界から移されてきたものであり、また盆に盛られた水が野の泉から汲まれたものであると述べることで保たれていた。前段冒頭に触れた錢徽・韓愈らの唱和詩の中で錢徽が「泓然たり一缶の水、下拗堂と接す。青菰八九の枝、円荷四五の葉（泓然一缶水、下與拗堂接。青菰

八九枝、圓荷四五葉」と詠ったのに対し、韓愈が「翻翻たり江浦の荷、而して今生じて此に在り。擢擢たり菰葉の長き、芳根復た誰か徒す（翻翻江浦荷、翻翻江浦荷。擢擢菰葉長、擢擢菰葉長）」と返し、王建が「盆裏野泉を盛る（盆裏盛野泉）」と述べたのがそれに当たる。また先にも論じた通り、韓愈の盆池は「天を映す」ことで小さな世界に広がり、奥行きを獲得した。ここでは一步進んで、盆池のなかに外界の天地の「趣」や「心」（本質、エッセンス）が備わっているということで、閉じた小さな世界は、大きく広がる外界の天地とつながり、そこに遊ぶことは「千里の遊」にも等しいとされたのである。盆池の小さな世界と外界の天地とのこのような関係性は、北宋の「盆池」詩に多くみられるもので、たとえば王安石「壬子偶題」（『王荊文公詩箋注』巻四四）がまどろみのなか、盆池の水草を打つ雨の音に江湖を行く船の櫓の声を聞き（『黄塵投老倦匆匆、故遶盆池種水紅。落日歌眠何所憶、江湖秋夢櫓声中』）、秦觀「盆池釣翁」（『淮海集後集』巻四）で、詩人が盆池の釣翁像に、官を辞して小舟で五湖に漕ぎ出した范蠡を憶う（『誰刻仙材作釣翁、尺池終日釣微風。令人却憶鴟夷子、散髮五湖狂醉中』）のもまた、同様の趣旨といえるだろう。

文学のうえで梅堯臣の盟友を自負した歐陽脩にもまた、三十句からなる七言歌行の「盆池」（『歐陽文忠公集』巻八）がある。「西江の水何ぞ悠なる哉、瀟石を經歷して險にかつ回る。余波拗怒して猶お涵澹、奔濤擊浪して常に喧逐（西江之水何悠哉、經歷瀟石險且回。餘波拗怒猶涵澹、奔濤擊浪常喧逐）」と、勇壮に、そして詩題からするといささか唐突に詠い出されるこの作品は、嘉祐四年（一〇五九）、作者が都で翰林学士の地位にあった頃の作。先に挙げた四句は、屋敷の庭にあった盆池から、ふるさとの雄大な山河——贛江と彭蠡湖、ともに現在の江西省にある——を想像したものである。中盤、自然の水のもつ巨大なエネルギーは、水を分け天を翔る龍として描かれ、千変万化し、人命や世界の安寧すら一顧だにしない力を揮うものと表現される（『忽然と遠く千丈を引きて去り、百里の水面中分して開く。蹤を収め跡を滅して処を知る莫し、但だ雨雹の風雷に随う有るのみ。千奇万変聊か一戯し、豈に溺死するを顧みて哀しむべきと為さんや。人の命を軽んずること螻蟻の若し、山嶽の將に傾頽せんとすに止まらず（忽

然遠引千丈去、百里水面中分開。收蹤滅跡莫知處、但有雨雹隨風雷。千奇萬變聊一戲、豈顧溺死為可哀。輕人之命若螻蟻、不止山嶽將傾頽」)。〔盆池〕詩の系譜のなかでは破格の力強さをもつこの作品は、それでも、小さな盆池から外界の天地を思うという点で共通するが、詩の最終盤、作者が政治的地位に縛られた自己の在り方を、庭の片隅に置かれた狭小の盆池に仮託し、またそこに逼塞する魚を憐んで盆池を否定する点で異色である(「陶盆の斗水 仍お下に漏れ、四岸久しく雨ふりて 蓴苔生ず。遊魚撥撥たるも寸に盈たず、泥に潜り日に炙られて 鰓の暴くを愁う。魚誠に幸ならず 此の跼促、我能く決去するも反つて徘徊す(陶盆斗水仍下漏、四岸久雨生蓴苔。游魚撥撥不盈寸、泥潛日炙愁暴鰓。魚誠不幸此跼促、我能決去反徘徊)」。否定的言辭から詠い出し、多くはその小ささを肯定して終わる盆池詩の系譜にあつて、特異な作品とみることができよう。

三 「門外の江濤雪堆と湧くに、盆を埋め沼と作すは亦た何ぞや」——南宋の「盆池」詩

南宋期の盆池詩に、韓愈や北宋期の作品にみられるような際立つた特徴を見出すのは難しいように思われる。たとえば陸游の作中に登場する盆池は「埋盆池激灑、累瓦塔崔嵬」(「老境二首」其一、『劍南詩稿』卷三八)、「花前騎竹強名馬、階下埋盆便作池」(「戲遣老懷」五首其一、同卷六五)、「老翁七十如童兒、置書不觀事遊嬉。園中壘瓦強名塔、庭下埋盆聊作池」(「秋晴每至園中輒抵暮戲示兒子」、同卷三〇)のように、韓愈の語を巧みに取り込んで自らの老境を戲画的に描く際の道具立ての一つであり、また「雨は疏松たる響きを送り、風は細細たる紋を吹く。猶お緑萍の点稀なるも、已に小魚の群を映す。傍らに一拳石有り、又生ず膚寸の雲。我來たりて閑として影を照らし、一たび笑いて綸巾を整う(雨送疏松響、風吹細細紋。猶稀綠萍點、已映小魚群。傍有一拳石、又生膚寸雲。我來閑照影、一笑整綸巾)」(「盆池」、同卷三五)などにみられるような自己を投影する鏡として描かれる。敢えて言えば、小さな世界に自足し、大きな世界とのつながりを見出そうとはしないことが、特徴と言えるだろうか。陸游には他にも「門外の江濤雪堆と湧くに、盆を埋め沼と作すは亦た何ぞや。兒曹は解せず 渠の翁の意、新たに風波の嶮処を脱し來る

を（門外江濤湧雪堆、埋盆作沼亦何哉。兒曹不解渠翁意、新脫風波嶮處來）（「盆池」、同卷一）と述べた七絶があるが、この中で詩人は「外の世界には白波さかまく大河があるというのに、どうしてちっぽけな盆池など作るのか」と不思議がる子らに「お前たちに老翁の気持ちはわからんだろう。私がやっと外の世界の荒波をかいくぐって、この小さな池に平安を見出しているということが」と答えている。盆池は危険に満ちた江湖から切り離された、安寧の場所となっているのである。

陸游とほぼ同時代の喻良能「盆池」（『香山集』巻一一）はまたこの小さな世界を次のように描く。「方池を小鑿して醉吟に供す、纔かに斗水を添うるに浪偏えに深し。心を鑿くに未だ寒泉の井を数えず、目を明らかにするに何ぞ寸碧の岑を須いん。樹影落つる時清きこと玉を浸すがごとく、魚鱗動く処細かきこと金を浮かぶるがごとし（小鑿方池供醉吟、纔添斗水浪偏深。鑿心未數寒泉井、明目何須寸碧岑。樹影落時清浸玉、魚鱗動處細浮金。……）」。心を鑿き、目の曇りを払うのに、もはや遠い山水は必要もない。水に浸る樹影を碧玉と見せ、さざ波にきらめく鱗は金を散らしたかにも見えるこの小さな世界の美があればよいのだ。ここにもやはり、外界から隔絶され閉じた世界に内向し、自足するさまが描かれているのではないだろうか。

またこの時期の「盆池」詩に、「壺中の天」「芥子、須彌を納む」という表現が用いられていることも指摘しておきたい。前者は北宋末から南宋にかけての詞人・王之道の作。「苔を剝りて古鑑を得、湛湛たり清らかにして渾らず。大なる哉壺中の天、俗子に言うこと勿れ。誰か能く時に井を汲み、茲老瓦の盆に注ぐ。従容たる儻を覩んと欲して、海を横る鯤を羨む無し（剝苔得古鑑、湛湛清不渾。大哉壺中天、勿與俗子言。誰能時汲井、注茲老瓦盆。欲觀従容儻、無羨横海鯨）」（「盆池」、『相山集』巻一）、後者は史浩の「時晉亨、小軒塊石の盆池を作り、名づけて趣遠と曰う。真隱居士、之を賦す（時晉亨作小軒塊石盆池名曰趣遠真隱居士賦之）」（『鄮峰真隱漫錄』巻一）にみえる表現で「片石遠山の意、寸池滄海の心。乃ち知る一芥子、納むる可し須彌の岑（…片石遠山意、寸池滄海心。乃知一芥子、可納須彌岑…）」である。「壺中の天」は、注2に記したように、小さな壺のなかに大きな別世界が存在するという意。

また「芥子、須彌の岑を納む」はもと『維摩詰經』不思議品にみえることばで、「須彌」は仏教で世界の中心にあると考えられている想像上の山のこと。小さな芥子粒のなかに大きな峰が納まるとは、大小・広狭を融通無碍に行き来することができることをいう。

南宋期の作品として最後にやや長くなるが王十朋が郡齋の築山を補修して水を引き、人工の水景を作らせたことを詠んだ作品を次に引いておきたい。¹¹⁾

山從何來石無根 水從何來山無源

山は何より来る 石に根無し、水は何より来る 山に源無し

忽然幻出如自然 群峯峯聲聲潺湲

忽然と幻出して自ら然るが如く、群峯峯聲として 声潺湲

石工貌愚性機巧 兩手頃刻成陶甄

石工 貌は愚なるも性は機巧、兩手 頃刻にして陶甄を成す

坐移野景到城郭 解使平地生林泉

坐ち野景を移して城郭に到し、解く平地をして林泉を生ぜしむ

香爐瀑布名天下 雁蕩龍湫更蕭洒

香爐の瀑布 天下に名だたり、雁蕩の龍湫 更に蕭洒

名山不見典型存 得趣何須論真假

名山見えざるも典型存す、趣を得れば 何ぞ真假を論ずるを須いん

君不見晉公元勳兼盛德

君見ずや 晉公元勳 盛徳を兼ね

綠野堂前羅澗石

綠野堂前澗石を羅ぬるを

又不見行行正直韓退之

又た見ずや 行行正直なる韓退之

汲井埋盆成小池

井を汲み盆を埋めて小池を成すを

二公胸中有佳致 澗石盆池聊自戲

二公の胸中佳致有り、澗石 盆池 聊か自ら戲す

世間萬事皆戲耳 何止茲山與茲水

世間の万事皆戲なるのみ、何ぞ茲の山と茲の水とに止まらん

一種の芸術論とも読めるこの作品のなかで、詩人は自ら石工に命じて作らせた人工の山景水景を、虚空から現れ出て山野の景を城郭に移し、平地に野の泉さえ生み出したようだと評し、廬山の香爐峰や雁蕩山の龍湫など天下に名だたる名山名水が無くとも、そこにはそのエッセンスが存在する（「名山見えざるも 典型存す」、その興趣を捉えられ

ばもはや真偽すら問題ではない（「趣を得れば 何ぞ真仮を論ずるを須いん」と自賛する。さらに、唐の裴度が緑野堂に設けた築山、韓愈の盆池を組上に載せ、それら全ては作り手がつすくれた胸襟、「胸中の佳致」が生み出したものと断言する。「盆池」はここで、外界の天地から自律した、詩人のこころの産物と位置づけられているのである。

四 「九雲夢」と「百東坡」元・劉因の「盆池」

元代において学問と詩文を兼備した存在の筆頭に数えられる劉因には「盆池」と題した作品が三首ある。以下はそのうちの一首である（『静修先生文集』巻八）。

自慙眼孔一盆多 奈此無邊風月何 自ら愧ず 眼孔一盆の多きを、此の無辺の風月を奈何せん

莫道渾非九雲夢 不妨能著百東坡 道う莫かれ渾て九雲夢に非ずと、妨げず能く百東坡を著くを

斡旋在手天隨轉 虚靜如心景自過 斡旋手に在りて天随いて転じ、虚静心の如く景自ずと過ぎる

誰弄扁舟詫呉越 爲言吾老怯風波 誰か扁舟を弄して呉越に詫らん、為に言う吾老いて風波を怯ると

小さな盆ほどの私の見識で、廣大無辺の自然の美をどうして捉え得よう。雲夢沢を九つもあわせたほどの大きさはないが、その内に百の東坡を容れることもできる。造化の運行を手中に収めれば、天もその内をめぐり、静かな水面の如き心はあらゆる景を映し出す。なればどうして小舟に乗って広い世界に漕ぎ出す必要などあろう。だから私は「年寄り世間の荒波が怖くてね」などと言ってみせるのだ。

冒頭、作者は巧みに「盆」の一字を引き出しながら、盆池の小さな世界と、己の小さな見識とを重ねてみせる。「眼孔一盆の多き」は、詩人の見識の小ささを自嘲的に表現したものであると同時に、盆池の微小さの謂いでもあろう。「清泉一眼」「一眼の井」などの語が示すように、「眼」は泉や井戸を数える量詞でもあり、鏡の機能をもつ盆池もまた、周囲の景を写し取るという意味で地に開かれた小さな眼なのだから。この小さな盆池に「無辺の風月」をどうして容れることができるだろう、詩人たる自分はこの小さな見識で、廣大無辺の自然の美をどのように捉え得るといふのだ

ろう、と二句目は続く。「無辺の風月」は、あまりにも有名な蘇軾のことば「惟だ江上の清風と、山間の明月とは：之を取るも禁ずる無く、之を用うるも竭きず。是れ造物者の無尽蔵なり（惟江上清風與山間之明月：取之無禁、用之上竭。是造物者之無尽蔵也）」（『赤壁賦』、『東坡集』巻一九）を踏まえたもの。劉因にはまた「天は勝境を教て詩敵と為らしむ、未だ幽人の穩やかに関を閉さずを許さず（天教勝堺爲詩敵、未許幽人穩閉關）」（『秋郊』、『静修先生文集』巻九）の詩句があり、この冒頭二句と響き合う。天地の佳景（＝勝境、無辺の風月）は、詩人にとつて格好の素材である以上に、その認識とことばを以て挑む相手、粗雑な認識や安易な物言いをその美をもつて拒む「詩の敵」であるからであろう。同時にこの二句は、唐代以降の「盆地」詩が当然のように詠い継いできたもの「小さな盆地が大な天を映し出す」というテーゼに反問してみせる。「小さな盆地にどうして天世界を映すことができるのだ」と。続く四句は、その自問に対する答えである。三句目の「雲夢」は雲夢沢と呼ばれた大湖沼地帯の名。また四句目の「東坡」は無論、北宋の詩人、蘇軾を指す。「九雲夢」は蘇軾に「如今惟有談天口、雲夢胸中吞八九」（『贈李兕彦威秀才』、『蘇軾詩集合注』巻四三）などの用例があるほか、陸游の「已吞八九雲夢澤、更著百億須彌山」（『道室雜詠六首其六』、『劍南詩稿』巻五七）、喻良能の「胸中似有九雲夢、筆下倒傾三峽流」（『司戸李巖詹和予廬山詩二十一篇作詩爲謝』、『香山集』巻九）などが示す通り、「胸中」の広大さを示すことばである。四句目の「百東坡」が踏まえるのも同様に蘇軾の「頰に泛ぶ（泛頰）」（『合注』巻三四）の一節。頰水に舟を浮かべ、飽く事なく水を俯瞰する詩人は、あるとき水に映った自身のすがたをみてこう詠う。「画船明鏡に俯し、笑い問う汝誰とか為すと。忽然として鱗甲生じ、我が鬚と眉とを乱す。散じて百東坡と為り、頃刻復た茲に在り（畫船俯明鏡、笑問汝爲誰。忽然生鱗甲、亂我鬚與眉。散爲百東坡、頃刻復在茲）」——私は船に乗り、鏡のような水面をのぞきこんで、水に映る我が姿に向かつて「汝は誰か」と問うてみた。すると静かな水面にうろこのようなさざ波が立ち、我が鬚眉をかき乱し、我が姿は無数に散らばる影「百の東坡」となったが、かと思うとまた波は静まり元の姿に戻った。劉因はこれらの語を対句に用い、この盆地、そしてわが胸襟は、「九つの雲夢」を容れるほどの大きさではないが、「百の東坡」を容れることができるのだと述べた。「百

の東坡」は、表向きはさざ波に散らばる無数の影の意であるが、小さな世界が内包する無限の変化を含蓄する。また、ことばそのままに、百人の蘇東坡、ひいては百もの詩人が紡ぎだす無限の詩想の意味ともとれよう。「百の東坡」を容れる小さな盆池（＝詩人の胸襟）は、実は「九つの雲夢」よりも更に大きなものなのである。その盆池は天地の運行を掌ほどの小さな世界に捉え、天もその内をめぐり、その水面が鏡のように静まるとき、人の心の如く、あらゆる景を写し取ってゆく。五・六句はそれぞれ「手」と「心」の語を用いることで、再び詩人のことばと胸襟を暗示する。無限を内包するこの小さな世界を出て、どうして外の世界に漕ぎ出す必要があるだろう。だから自分は「外の荒波はきつくてね」などと年寄りぶってみせるのだ、とかすかな諧謔味を残して詩は終わる。先に挙げた王十朋の作品のなかで「盆池」は、詩人のすぐれた胸襟が産み出したものとされたが、ここでは詩人と「盆池」は、外界のすがたをその内にとらえ、像として、またことばとして映し出し、描き出すという点において、一体のものとして捉えられているのではないだろうか。

結び

「盆池」詩は、韓愈の「盆池」五首に代表される初期の作品から、元・劉因に至るまで、ほぼ一貫して「小さな世界の大きさ」を称揚するものであった。だが、一見同質のものにみえるその「大きさ」の在り方は、時代により変容していったように思う。唐代の「盆池」詩にとって、その大きさは「天を映す」こと、月を浮かべ、星を泳がせることに由来するものであり、それによって小さく閉じられた人工の池沼は、外界との有機的なつながりと、時間的空間的な広がり、興行きを獲得する存在となった。北宋期の「盆池」詩は、盆池そのものを描くことから、盆池とその小ささを契機として自らの処世における在り方を問うものとなり、その大きさもまた、外界の天地のエッセンス「万里の心」や「江海の趣」を体現することに由来するものとなって行く。更に南宋以降、盆池の世界のもつ大きな広がり、外界へではなく、内側へと向かうようにみえる。小さな盆池の「大きさ」の本質を語ることは、先に挙げた「江

海の趣」のような外向きのベクトルをもつものから、「壺中の天」「芥子、須彌の岑を納む」といった内への広がりを示す表現へと移るのも、そうした変化を示唆するものではないだろうか。更にいえば、元・劉因が、盆池に「廣大無辺の自然の美をとらえる詩人のこころ」を仮託したことにより、外なる世界と内なる世界の境界は消失し、一つのものとなつたと言えるかもしれない。あるいは、内へと広がることで、盆池は、有限の大を超えた無限の小というべきもの、無数の変化を内包するものとなつたのではないか。水面に散らばる「百の東坡」がそのことを示唆しているように思う。

注

- (1) 唐浩虚舟「盆池賦」環織草以彌澈、泛流萍而更碧。沙洲連一畝之地、山翠接如拳之石」(『全唐文』卷六二四、傍点筆者)。
- (2) 王毅『園林與中国文化』(上海人民出版社 一九九〇) 第一篇第二節参照。「壺中天」とは『後漢書』卷二八方術列伝にもとづくことば。市場の役人であつた費長房が、薬売りに身をやつした仙人が市が終わると店頭に吊るした壺の中に跳び入るのを見て、あとをついて壺に入ると、そこには酒やちこそうがならぶ別世界があつたという故事に由来する。一般的には理想郷・仙界の意で用いられることが多い。
- (3) 「官舍内新鑿小池」「小池」二首(『全唐詩』卷四三〇)、「過駱山人野居小池」(同卷四三二)など。また、白居易の小池詩については先行研究として赤井益久「白詩風景考」(『中唐詩壇の研究』創文社、二〇〇四)があり王毅氏の指摘する「壺中天」の思考についても触れられている。
- (4) 錢徽・韓愈の唱和詩および『盆詩』五首は『韓昌黎詩繫年集釋』卷九、王建詩は『全唐詩』卷二九七所収。唱和詩の繫年については丸山茂「白詩交遊録—錢徽(下)」(『日本大学文理学部人文科学研究紀要』六二号 二〇〇二)に引用される遅乃鵬氏の説を参照。「盆池」五首について孫昌武氏は「制作年は定かでないが暫く旧本に従つて元和十年に置く」とする(『韓愈選集』上海古籍 一九九六)。

- (5) 清水茂注『韓愈』(岩波書店、岩波中国詩人選集一集①、一九五八) 所収の年譜参照。
- (6) 紙幅の関係で言及できなかったが、其一に關しては、Stephen Owen, *The End of the Chinese Middle Ages*, Stanford University Press, 1996 の *Wu and the Private Life* に興味深い論考がある。
- (7) 川合康三『新編中国名詩選(中)』(岩波文庫 二〇一五) 参照。
- (8) 蛙は姿形で雌雄の区別がつかないが、主に雄が鳴囊を持ち、声をあげて鳴く。後半二句はこれを踏まえての表現と解した。
- (9) 久保天随訳『韓昌黎集』巻九(続国訳漢文大成、国民文庫刊行会 一九二八) の指摘による。
- (10) この他、類似の表現をもつ作品として「移得龍泓激澗寒、月輪初下白雲端……」(陸龜蒙「移石盆」、『全唐詩』卷六二八)、「圓内陶化功、外絶眾流通。別疑天在地、長對月當空……」(五代前蜀・張蠙「盆池」、同卷七〇二)などを挙げることができる。
- (11) これに先立つ作品に王禹偁の「與方演寺丞覓盆池」(『小畜外集』卷七)があるが、この作品は「涵星泳月無池沼、請致泓澄數斛盆」の表現に見て取れるように、基本的には唐代の「盆池」詩の性格を踏襲したものである。
- (12) 作品の解釈については李之亮箋注『歐陽脩編年箋注』(巴蜀書社、二〇〇七)を参照した。
- (13) 『維摩詰經』不思議品「以須彌之高広内芥子中、無所増減」。
- (14) 「郡齋舊有假山、暇日命工葺之取石之嵌者、罅置山頂、汲水篔竹、引而激自頂而下、有懸崖飛瀑之状、予既以蕭洒名齋、因鑄二字于石、戲成古風」(『梅溪王先生文集後集』卷九)。